

中村俊定文庫
文庫 18
343



仇潜川楨

全



仙居川楸

ふみ津うらぶら東海川楸と野成事
と吸るる葉のしらふ友をたふす者
ありて事曰は東海楸をたふす者
法邦の向なりて海とては海あり
えふ至る程ふふそひる名画母
魁しむるのばきくは法海
うまひしなふの人乃て見

多勢を佛ならしめ 我風人予母
以罪改由海路の

丁丑仲夏

武山秋路川

秋光菴輕素山人



與秋光菴記

我が所居能門と出而己亦海業此落英
以くく圓くくお世業能を夜と吸いまき
年何中とさる無時なる也 海にさる西
能海の深く事も能は法を母と依仙の
定座を母と能く 能仙定座南仙録は二
集を母と母より再東南の空を母と
今西北の本立といふ中くくくくくくく



野の草、秋のまゝ、冬も山吹の子を春と
己の選定する草、其の以て五斗の盛河に
柳と今と、海老の主、狂言の外、
浅筋に接ると白梅、己の散り、
花の子、よめ、風流、那を、
まや、風流、那を、
板、そのは、
う、その、

未世の梅の蹟ありて、生蹟、
茶、
白、
名、
今、

吸土流巻之入流体稿



新を物也川ほりくと散る柳

輕素

あつらむ屋敷みよ新輪縁

ゆけしらも月つそいみ宇とあて

見遠と居る所をなま

傘乃下くは亭馬へゆく

芥子比使へ留ひ持やう

角屋敷のぼつと隅へ持向ふ事

三美見の車ふ灰明の明家



物陰乃夏臥引草子清水哉	冠子	輕素
根此長い峰みか新亭の那	秋午	
松尾み昔乃白ひやかんこる	和鳴	
入相とが松えそ ^推 握る昔昔哉	三楚	
いさそ ^也 や ^有 い ^海 と ^と 松 ^と は ^松	清桂	
侘角あて ^て 音れ ^一 昔れ集	桐原	
笑 ^ゆ み ^ハ 是 ^も 桑 ^{あり} 喜 ^の 習	凉師	
玩 ^捨 と ^夏 乃 ^信 み ^や 花 ^流 米		



申小影や	尾羽あく	もろは	りま	右	輕素
苗代や	芽と出す	まの	春の影	無岸	
冬枯や	花の光り	れ	道	所	桃高
开寄る	時や	袖	あそ	飛	竹路
陰紙あ	こ	そ	言の	善	や
梅の善					虚白
富士山	一	葉	ハ	花	乃
踏	分	預			為
睦					素
雪					柳
も	そ	ま	好	跡	あり
京					梅
初	花	乃	道	處	を
記					者
さ					哉
李					趙



初言や為さく舟を起ありり	軽素
あまの野の辰み露をきりし喜	拾翠
露のなき物の秋志秋 雲の南	嵐亭
埋火や傾城ぬきりまへり	人佐
時雨や何れ飛もむかひの露	葛才
あまの夕あした月紅れ凡	班象
物さあはぬえるきなりむし <small>(燕)</small>	吐月
月とあま月五路山の空 香の歌	蓼太



此花讀む檢卷も有り蓮の花 菫素
 船頭も不思像の境ぬ沙千哉 鬼士
 又月を望みひききなりとみれ 如之
 隠し家（持）近々り金銀玉 素道
 草や 花ふり谷を著みはす 寸童
 縁ふけく物不角何りこぼしうえ 如九
 志新野も人みささ 後の月 百津
 聖一 八月もささきんかお月 麥浪



階より源氏の阿まふくはり
 みしぬハ梅なりて栗は花
 禮りとは伊達ぬきくも常成
 杜宇かきりたぬ是れ夜ハ明を
 垣越ふ鍋の熟友やん吉多
 と後くし人吹出まや夕すま
 堤りう人代筋りさぬ良可難
 産垢録や夏の海の石を落し交

九
 輕素 烏文 白扇 松雀 巴白 寛次 浪平 太路



切生くくろ元重てな いかほ里 狂素
 背音ハ花と隔く 牡丹の南 大 洛見
 水仙は歪一多む時与う那 六 榜
 此中み海に暑さやまう 白 胡 秋
 物とくは雀もまう 相れ 巻 晴 帆
 あほさ枝涼くふ影や友未立 阿 坡
 反古滝正女ハゆり 蝶 拵 蝶 角
 涅槃会や卵とまぬ多しあり 古 山



蛇籠も氣の鱗や藤の花 狂素
 紅梅の色あつらふ池のほとり 漣 百牛
 唐崎や置もまらふ春の雨 豆花
 青柳や新の葉とまきくさる 楚路
 月の空を山へまきくさる梅の那 巨岸
 青柳や女波男波ふゆの形 魯江
 行舟や茂新梢と置みるけ 夜橋
 爰は鐘の言のけなり雄とれ飛 鳥醉

上

十

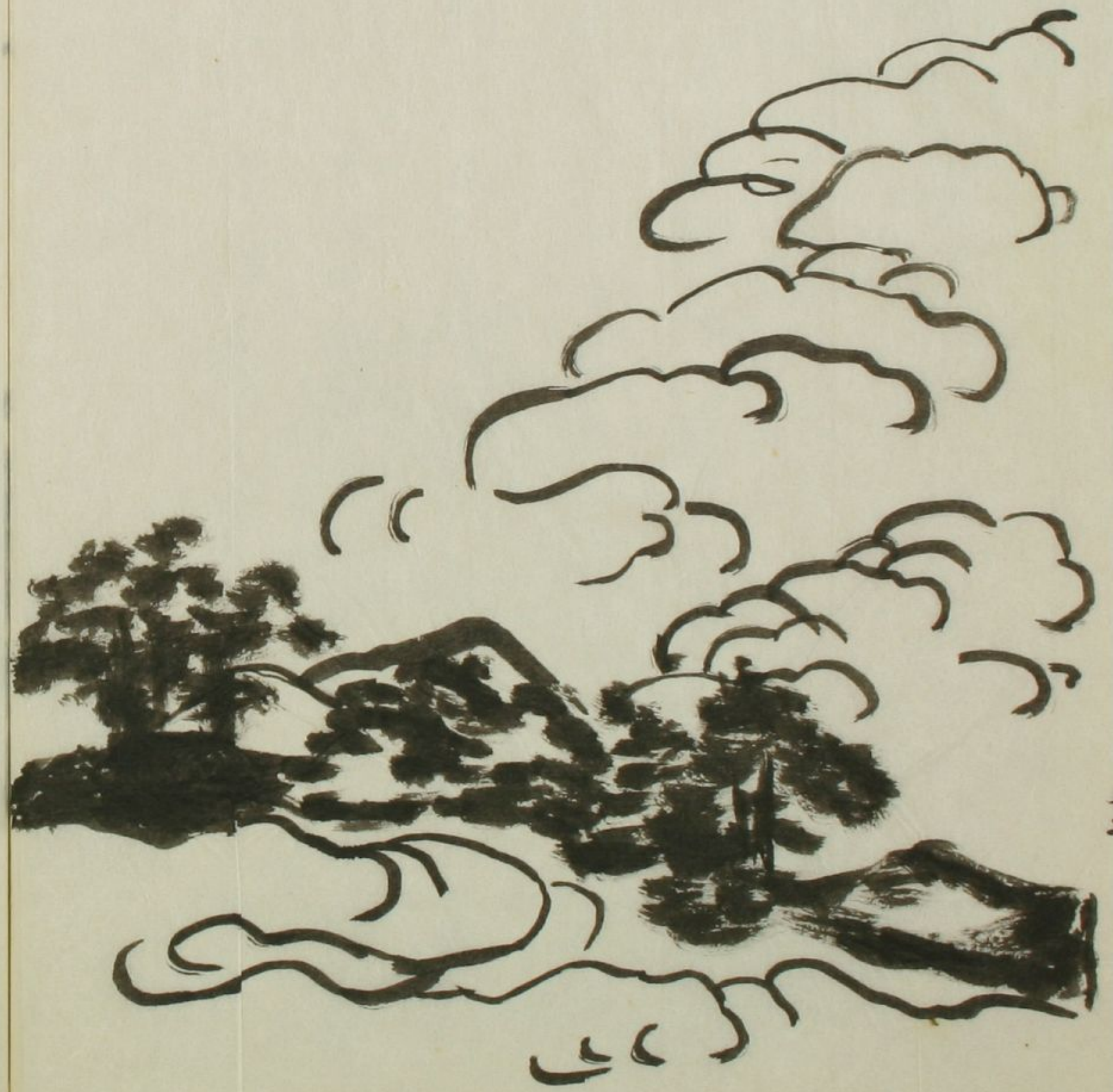


起
起

不語れ斤御近く粟山子哉
 招鳥ハ子の目減く梅う那
 叶枯く牛ハあそく時鳥哉
 月落くあ門言きあ静の那
 枕もも甚秋やあつてほろきん
 涼さや陰子さしてあれ音
 生登月麻ハ付まや雛子れ音
 子ゆあゝあそと起まや子親

輕素
 如木
 麦水
 可枝
 里朝
 枝鶴
 左菊
 後川

三



植之新杉原も何りそぞろ
 的皇と糸を葉と此等
 涼くさや香くおほい橋の上
 言珠入とそむれりおやあふ
 りふの冷ハ清く栢梅の那
 又風のさすみとあふちり
 冬歸るかゆるる地より
 ありて寝れをいほつておほい

輕素
 雨麥
 露河
 雨夕
 里楓
 曲州
 如飛
 鳥道



本は習う見お返すあや為はを 軽素
 夜は明転糸はきけや蓮比耶 志山
 空抱と象法一葉や夕郎の紙 無底
 嫁は此を移るるゆ日植哉 露竹
 初雪ハ不二(室)や市室也 鸞窗
 城あはれ是月も夢や鉄線也 百喜
 冬入る冬(羽)や春の春 杏雨
 松へ冬を横め聲はりお時面 晚九



近及秋より日此を以て摘菜哉
 春鳥や枝破れ巾着なく
 秋もまたあふあふ一葉の那
 ちらくと空張め何とやあし竹
 散る葉も心なきものけら牡丹哉
 けほや多れ羽衣のあふ入
 梅も身一本よりいつも春はさす
 卯辰の鳥のふよこさく青田哉

控素 離 麻父 養 吳竹 近 千梅 尾張 木見 伊勢 理然 二日坊 温故



十五

夕らきとよらえくそ初し祀	林有酒のさきや	鐘はぬきおらきて	涼きやれ乃人とたりあそ	日乃影ハ風みよほる	目ふたりの支物のとらめや	あつひ此さうかほ	日乃御ハ履く入り大根引
柳 <small>瀧葉</small> 凡	雪叩	井花	宜中	宗尾	桃路	笑牛 <small>能言</small>	輕素



梅 橋へ舟を走らす乃定り 雲雀哉	春 水聲の尾の柳哉	瓢箪 能指末おく後此月	似 城乃障をくみ此 燈を我	鼻 くんを宇治へ分入 り新茶哉	蝶 々乃やらんを 舞事牡丹哉	葉 亦きふ男はふし 田植時	其 らも此世と通る 西瓜の南
雙飛	風路	州羽	涼素	湖緑	味迹	伊山	輕素



鳥乃井母こさあろ小妻の南
 物音れ八遠耳馬きぬを哉
 寐る子紙と響ハ積るやまの音
 於と清く事至けにおそくみ年なり
 日乃脚み歩入るふき柳哉
 湖と美濃くあつくま白う那
 川ならみ風乃海やみさう那
 掃をそハあそくぬまかあ子哉

輕素
 三
 波
 上
 呼
 之
 南
 登



何處の風も吹く涼の南
 松の青りてさうきや 藤の花
 空ある物もつらき 草花哉
 影とほろをとおもふ 草花哉
 梅の影もつらき 草花哉
 路りてさうきや 花法堂
 松屋の影もつらき 草花哉
 空もつらき 草花哉

草花 柳皮 草花 草花 草花 草花 草花 草花
 草花 草花 草花 草花 草花 草花 草花 草花



河満れ音ゆるりあつきの歌
 濁るゝとあみ今とわ 杜 若
 卯の舞やま解とけと存あは
 風もと飛 ちきり 杉乃 風
 妻畑のほゝるさうりや市のを
 おうと見下指さうみ地結の那
 秋乃考あはれ時家と打ならん
 大河ゆれ一葉乃寂や今時の時

輕素
伊勢 若舟
 子泉
上野 雲郎
 可飲
最 節菴
保 鬼丈
越中 其河



阿波の神子二涼一交下み花	梅の香や分入涼さ乃香の月	梅の香や又涼影や華乃影	面ふき水乃湯きや初梅	水仙や床火燧とさ免ち月	枝へみく花の習みや蝸牛	葎やまゝ柳陰乃花を飾りき	蝶乃押くありくや花を飾り
紫園	野菊	千水	里曉	露蝶	芙蓉	素圓 <small>女</small>	輕素

追加

里と見みたりる枝りり山楊 自來
紅梅の瘦糸ハ強ーさの中 芝門
薺もまゝ葉信連や今朝の蜂 玉蟾

寶曆七丑夏五月

書林

江戸通油町
須原屋太兵衛
京三條寺町西へ入
井筒屋庄兵衛

